地の人へ、風の人へ。
浅間北麓じまんマガジン

# きたかる

2017年
秋は一瞬、冬が来た号

Since 2010
VOL.8

表紙の人・星野真一さんご家族

## 地元で叶えた家族のおいしい夢

大屋原で酪農を営む星野さん一家。個性派で人気者の〝シンちゃん〟と、明るく家庭的な〝ミキちゃん〟の同級生カップルが結婚してから20年。牛が怖いと思ったことなんてないという子供たちも次々と大人になり、星野家は今年、新たな一歩として「ASAMA 4 wayテラス」の一角に「北軽井沢ジェラート」をオープンしました。「今は自分の 牧場の牛乳が誰にどうやって売られているか分からないシステム。だから自分の牛乳を使った乳製品を作って人に提供したかった」と語る〝シンちゃん〟こと真一さん。牧場直営とはいっても、餌となる牧草作りから毎日の牛の世話、ジェラートの製造や販売まですべてを自分たちで手がける店は、他にはなかなかありません。アイスクリーム好きだという真一さん。食材の風味を活かしたジェラートの味は、地元の季節野菜を中心に、ホウレンソウ、トウモロコシ、インゲン、トマト、ビーツなど様々。夫婦で試行錯誤しながら新しい味を作っていく姿はとても楽しそう！「お店を始めてから人との出会いが増え、世界が広がった」と言う美紀さん。理解して手伝ってくれる家族や、来てくれるお客様への感謝の気持ちは尽きないそう。地元に根付いて、地元を活かして生きていく。北軽の理想的な暮らしがここにあります。

北海道で酪農を学んだ真一さんは、その後北軽井沢に戻り家業を継ぎました。ご夫婦は二十歳の頃から４人のお子さんを育てるしっかり者。美紀さんはふんわりとおいしいパン作りが得意なお母さんですが、離れて暮らす息子さんもパティシエの勉強中。将来、星野ファームの牛乳で作ったお菓子を焼いてくれるのでしょうか。星野家の夢はまだまだ広がりそうです。

特集・きたかる「冬の食卓」

別荘地、また酪農や高原野菜の産地として知られる北軽井沢。火山のふもとの荒れ野原だった一帯に、どのように人の手が入り、どのような暮らしを営んできたのか。その歴史を紐とくと、他の地域には見られない、驚くべき独自性が見えてきます。今号では、そうした北軽独自の文化や成り立ちを「きたかる遺産」と（独断で！）命名。未来に受け継ぐ大切な資産として、あらためて見つめ直してみたいと思います。

食卓 × 焚き火

# 火のある時間を味わう。

日常の食卓から生の火の存在が消えつつある今、野外で焚き火料理が楽しめるのも、都会とは違う北軽井沢の冬ならでは。事実、北軽には「思う存分焚き火がやりたいから」という理由で移住してきた〝焚き火マニア〟もいるほどだ。

焚き火にも色々ある。落ち葉掻きのついでに小枝を燃やして焼き芋くらいは誰でも朝飯前。本格派になると、丸太をそのまま縦にして切込みを入れて燃やすスウェディッシュトーチや、横に置いてクサビで表面を剥がして燃やすフィンランド式焚き火といった北欧流の〝火遊び〟方もある。

パチパチと木がはぜ、あたりにはこんがりいい匂いが…というのが一般的なイメージかもしれないが、実際にやってみるとそんな優雅なものではない。火が安定するまでは、煙がすごい。目に沁み、全身が燻されスモーク臭に包まれる。火力の調整も難しく、たいていの料理は黒焦げ、もしくは生焼けだ。煙の臭いに負け、食材本来の味なんてわかったものではない。それなのに、である。

焚き火を囲む面々はなぜか笑顔。気づけばひとりまたひとりと火のそばに集まってくる。揺らぐ炎を見つめているだけでお腹も心も満たされる。

火のエネルギーの象徴のような浅間山をバックにぼんやり焚き火にあたりつつ、これ以上に贅沢な時間があるだろうか…なんて独りごちるようになったら、それはもうれっきとしたキタカリアン（＝北軽の風土を愛する人）の証である。

食卓 × ダーチャ

# ロシアのおふくろの味。

ロシアには、ふだんは都市に暮らし、週末になるとダーチャと呼ばれる郊外のセカンドハウスで菜園仕事を愉しむというライフスタイルがある。北軽井沢の山荘文化とも近いのではと興味を持っていたら、実際に北軽でダーチャ暮らしを楽しんでいるロシア人ご家族に会うことができた。ウラジミール＆イリナさんご夫妻にアンドレイくん。

この日、料理上手のイリナさんが腕を振るってくれたのは、食前酒代わりのコンポートジュースに始まり、自家菜園や北軽産の野菜と、スメタナというロシア料理には欠かせないサワークリームを使ったサラダ。ビーツの鮮やかなピンク色がパッと食卓を華やかにするボルシチは、トマトや根菜の甘みが凝縮した優しい味わい。

続いて登場したのは、ブリヌィというクレープ料理。もっちりとした生地に、好みの具材を載せたり包んだりして食べる伝統的な家庭料理だが、イリナさんのブリヌィには様々なハーブやスパイスを効かせた肉と玉ネギのミンチがぎっしり。「ブリヌィは日常的な料理ですが、特に2月、春を迎えるマースレニッツァというお祭りでは食卓の主役になります。そのあと復活祭までの40日間は肉や魚・乳製品・卵を食べてはいけないので、その時に存分に食べておくのです。」

スープやパイのレシピだけでもそれぞれ数十種はあるというロシア家庭料理。冬が長く厳しい国だからこその食の豊かさは、まだまだ奥が深い。

特集・きたかる「冬の食卓」

食卓 × 囲炉裏

# 地のものでおもてなし。

ところで、ここ浅間北麓地域に伝わる冬の郷土料理といえばどんなものがあるだろう？ 地元に古くから住む人たちに聞き込みをしてみると、「郷土料理と言えるかどうかはわからんが、昔は客をもてなす時なんか、よく『とうじうどん』を作ったねえ」との情報が。「とうじ」とはなんぞや？ さっそく食いしん坊を集めて試食会を。

とうじうどんはまず、囲炉裏がなくては始まらない。数十年前までは当たり前だった囲炉裏のある家も今では少なくなってしまったが、今回はとある古い養蚕民家をお借りして、火を焚かせてもらう。囲炉裏の炭が赤々と熾ってきたところに、具材と出し汁がたっぷり入った鉄鍋を火にかける。具材は、その季節に採れる野菜やキノコ、油揚げなど。出汁はシンプルに味噌のみ。煮込まれるにつれて鍋からは良い香りが漂い始めるが、ここまではいたって普通の鍋料理である。

そこに現れたのが一人前サイズの小さな「とうじかご」。この籠にひと玉ずつあらかじめ茹でておいたうどんを入れ、出し汁の中で泳がせるように温めてつゆと一緒に食べるので「とうじ＝湯じる（温める）」うどんと名がついた。こうすれば、鍋の中でうどんがふやけることもなく、「さあ、もう一つ」と勧められればつい箸も進む。

昔はもちろん、籠もうどんも手づくりだ。米がなければ麦でもてなす。山あいの村の暮らしならではの心づくしが伝わる冬のごちそうである。

食卓 × 酪農家

# 搾りたてミルクの家族ごはん。

かってのテレビ番組「突撃！隣の晩ごはん」よろしく夕食どきにお邪魔したのは、大屋原で酪農を営む成田さんの家。「こんばんは！」と扉を開くと、颯くん・まどかちゃん・快くんの仲良し3兄妹がぴょこりと顔を出す。キッチンに立つ母、裕子さんが木べらでかき回している鍋の中身は牛の初乳。「分娩後数日間の牛乳は出荷はできないのですが、たんぱく質や脂肪が豊富。熱を加えると固まるので、牛乳豆腐として昔から酪農家ではよく食べてたみたいですよ」と言う裕子さんに「俺はもう食べ飽きたけどなぁ」と夫の豊さん。味見をさせてもらうと、チーズよりはクセがなくさっぱり。醤油も合うが、裕子さんお薦めのメイプルシロップをかけるとスイーツのように美味！

食卓には牛乳豆腐のほか、ホワイトクリームグラタンにミートボールやサラダ（デザートにプリンも）が並び、待ち兼ねた子どもたちと一緒に「いただきます！」グラタンとプリンにはもちろん自家製ミルクがたっぷり。酪農家にとっては当たり前だが、パック詰めされた牛乳の味しか知らない者にとっては一生手の届かない贅沢品だ。

フランスでチーズづくりを学んだこともある裕子さんには、いずれこの牛乳を使った自家製チーズを作れたらという思いがある。乳製品の加工販売には様々なハードルがあり、簡単にはいかないが、地元・北軽の同世代として、チーズ好きの食いしん坊代表としては、その実現が待ち遠しい。

# きたかる、わたしの冬の愉しみ。

## かまくらの飲み会

冬は毎年北軽に帰郷。寒いのにあえて仲間と集まって、かまくら作ってその中で酒飲むのがたまらん！店で飲む時より人の距離が近いってのがまたいいんだよね。
小金澤貴彦さん（飲食業／北軽出身／ 40 代）

## 雪が降った朝の静けさ

目が覚めると、しーんと静まりかえっていて音がない。音が吸われたような感じ。布団の中でもう絶対に雪が降ったからだと分かってるんです。分かっているのに、カーテンを開けて積もった雪を見るとドキドキする。
野口大介さん(システムエンジニア／北軽歴 22 年／ 20 代)

## 餅つき機が回るのを見つめる

お餅つくことはないけど、餅つき機でお餅を作ります。機械の中で、白いもち米がブルブル回って「餅」になってくのを眺めるの好きです。ただブルブル回ってるんですけど、可愛くて目が離せない。
丸山彩香さん（事務職／北軽歴 25 年／ 30 代）

## 動物足跡追跡

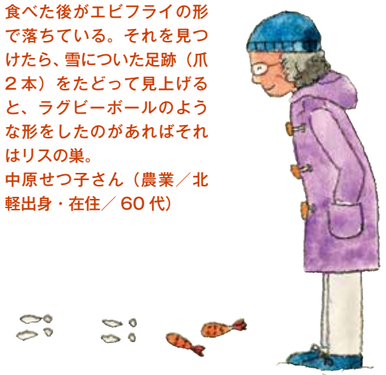
冬の森で動物の足跡を見つける。寒さも手伝って全身の神経が冴えてくると、にわかハンターのような気分に。さらに追跡していくと、だんだん動物のような気分になって、気づけば、腹が減っている。
山﨑陽平さ（キャンプ場勤務／北軽歴４年／ 30 代）

## 雪の結晶観察

雪が舞い出したら、手袋をはめて外に出る。手の甲でキャッチしてすかさず息を止め、見入る。一つとして同じものがない。こんな小さいものが、辺りを覆い尽くす途方もなさに、理由なく安心感を覚える。
山﨑悠貴（「きたかる」編集部員／北軽歴 22 年／ 30 代）

## リスの巣みつけ

新雪の時、松の木の下に行くと、リスが松ぼっくりを食べた後がエビフライの形で落ちている。それを見つけたら、雪についた足跡（爪２本）をたどって見上げると、ラグビーボールのような形をしたのがあればそれはリスの巣。
中原せつ子さん（農業／北軽出身・在住／ 60 代）



## 犬ぞり遊び

大きな犬を飼っていた時、雪が降ると犬にそりを付けて、家の近くの緩やかな坂のところで子供を乗せて犬ぞり遊び。楽しかった～
干川絹枝さん（農業／北軽出身・在住／ 60 代）

## スノーシュー散策

まとまった雪が降ったら、スノーシューを履いて森の中へ。フカフカの雪をふみつける感覚と、シーンとした静かな森の中で、自分の歩いて行く音を聞くのが好き。スノーシューツアーを企画して参加者の方と歩くのもとても楽しいもの。
櫻井雅和さん ( 長野原町営浅間園園長／北軽歴２年／ 40 代)

## 冬の夜の六里ヶ原

子供の頃から休みは北軽井沢の山荘へ。冬の夜の印象的な風景は、浅間白根火山ルートの六里ヶ原あたり。一本の道路と、月と、銀色に光る浅間山だけの究極にシンプルな世界。宇宙のどこかの惑星にいるみたいな気がして吸い込まれそうになります。
新藤真木子さん（横浜在住／北軽別荘歴 50 年／ 50 代）

## 薪ストーブ

冬の暮らしに欠かせない薪ストーブ。毎年、浅間山の初冠雪の日に火をいれるのがわが家の慣習です。愉しみは、中でつくる焼き芋。ホクホクでとても美味しいのですが、入れたのを忘れて炭になってしまうことも ...（笑）
萩原睦男さん（長野原町長／応桑出身・在住／ 40 代）

## 温泉めぐり

嬬恋村には鹿沢や万座をはじめ、約 10 の温泉があります。スキーのあとの温泉、雪を見ながら入る露天なども最高ですが、個人的なおすすめは極寒の夜の万座温泉日進館の極楽湯。仲間と入る夜の露天は心を開いて話ができます。
久保宗之さん（嬬恋村商工観光課・ツマ―コンダクター／嬬恋出身・在住／ 40 代）

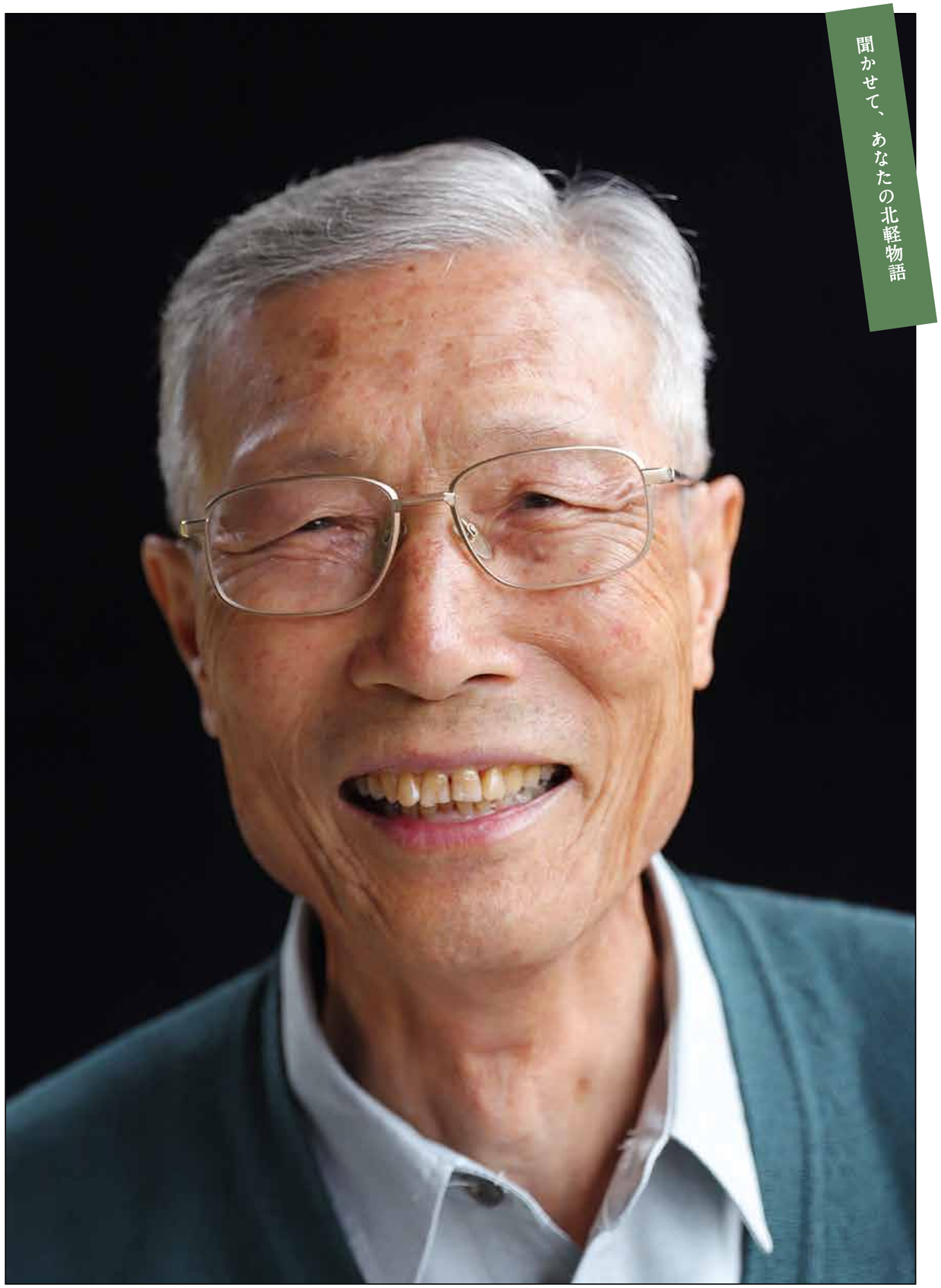
## 炭焼き小屋

冬仕事のひとつ、炭焼きのお手伝い。炭焼き小屋では色々な人と話をして、寒くても体はほかほか。お喋りの合間にみんながぼーっと炭火を見つめて無口になる瞬間があり、そんな時間すらも温めてくれる不思議な力が炭火にはあるみたいです。
島村静香さん（観光・飲食業／北軽歴２年／ 30 代

## お正月の支度

地元の方に習って、昨年初めて、藁を編んだしめ飾りや、長野原や嬬恋に伝わる道祖神という木のお人形のようなお供え物を作りました。身近にあるものを使い、自分の手を動かして準備をすることで、新年に向けて気持ちがいっそう改まります。
藤野麻子（「きたかる」編集長／北軽歴 13 年／ 40 代）

イラストレーション／加藤彩子



# 放課後になると子どもたちが「遊ぼう！」とやって来て。職員室でゆっくり座っていられたことなんてありませんでした。（青木利夫さん・82歳）

このお顔写真を見ただけで、北軽井沢で生まれ育った50代以上の方ならすぐに誰だかおわかりになることでしょう。青木さん、とお呼びするよりは、やはり「青木先生」というほうがしっくりきます。

昭和10年、応桑生まれ。中之条高校、宇都宮の大学を経て、昭和31年、新任として当時の第三小学校（現在の北軽井沢小学校）へ赴任。以来、地域の小・中・高校の教壇に立ち続け、平成8年に定年を迎えるまで、教師生活は丸40年を数えます。

先生のお宅にお邪魔すると、教師時代に写した数多くの写真が収められたアルバムが、今もたくさん残されています。学生時代からカメラが好きだったという先生は、フィルムや印画紙が貴重だった時代にも関わらず、行事のたびに写真を撮っては、自分で現像をして、生徒たちにも配っていたそうです。

アルバムには先生ご自身の学生時代の写真もありましたが、当時からすらりと長身で、まるで映画俳優のようにハンサム！

今回は、先生の貴重なアルバムを一緒にめくりながら、昭和30年代の北軽の小学校の様子についてお話を伺いました。

中学を卒業する頃、担任の先生に「お前は学校の先生にでもなって、うちに帰ってこないとだめだぞ」と言われたんです。私は一人っ子だったものですから。それが教師を目指すきっかけになりました。当時は子どもが増えて、学校の先生が足りなかったので、高校卒業したてで教壇に立つこともできたんです。私はたまたま大学にやらせてもらえましたが。大学では理科を専攻し、2年で修了して、第二小に配属となりました。

第三小も、子どもは大勢いましたよ。私が赴任した年は全校生徒242名。昭和34年の記録を見ると、324名とあります。5年生を受け持ったときはクラスに54人いて、机の間を移動するのも大変なくらい、教室はぴっしりでした。それに対して先生は、校長・教頭以外は各学年の担当が一名ずつ。私と同世代の若い先生が多かったですね。

先生といっても、教え子とひと回りしか違わないわけですから。遊び相手のようなものです。職員室にいると、マル付けなんかやってないで一緒に遊ぼう！と呼びに来るんです。それで外で一緒になって走り回って。職員室でお茶を飲んでゆっくり座っているなんてことはまずありませんでしたね。私も若かったですから、楽しかったですねえ。体力はいりましたけど（笑）。

（女装に扮した着物姿の写真が現れて…）ああ、これは学芸会のとき。子どもたちの発表の後に、先生たちも演し物をやらされるんです。このときは漫談か何かやったんじゃなかったかなあ。背が高いものだから、ちょうどよい女性の着物がなくて、苦労して大柄の方からなんとか借りられて。親御さんたちもみんな見に来てますから、笑われましたね。

これはクリスマス会の写真（※ページ中央の写真）ですね。体育館なんてものはありませんでしたから、大勢が集まるときのために、2教室繋げられるように扉が外せるようになっていたんです。とっぱらい教室といってね、そういう部屋がありました。ここには今も地元に住んでる人がよく写っているんじゃないですか？　この子は○○だし、この子は××にお嫁にいった△△、この子は……（次々と指差してはすらすらと名前が出てきます。）

当時は旅行会社なんてなかったですから、修学旅行も自分で計画してひとりで引率して行きました。バスで着くと、子どもたちをバスに残しておいて走って電車の切符を買いに行って、子どもたちをみんな改札で通したら、最後に走って電車に飛び乗って、なんてことをやっていました。今思うと大変でしたね。子どもたちはそれぞれお米を持参していったんです。東京の宿ではお米が不足していたので、米持参でなければ受け入れてもらえなかったんです。これは（と、わら半紙を綴じたものを見せていただく）、私が作った修学旅行の栞です。ガリ版刷りですね。当時は文集でもなんでも、全部ガリ版で作ったんですね。

授業で使う道具も、今のように揃っていませんでしたから、理科の実験道具や模型なんかも全部手づくりしていました。学校から帰って、自宅で夜な夜な作るんです。次はどうやって驚かせてやろうかと考えながら。自分も楽しんでいましたね。

あちこちの教壇に立ちましたが、やはり初めてだったこともあり、第三小には一番思い入れがあります。子どもたちに静かにしろなんて言っても聞きませんから（笑）。自分も一緒になって負けじと声を張り上げてね。若かったですし、とにかく楽しかった思い出ばかりです。

青木先生は、アルバムの他にも、お話に出て来た修学旅行の栞などを今でも丁寧に保管されています。ガリ版刷りの栞には、パソコンで打ったようにきれいな手描き文字と、子どもたちの喜びそうなイラストまで多色刷りされていて、先生ご自身の几帳面さと、若い教師としての子どもたちへの情愛が伝わって来て、小学生の頃にこんな先生に出会えた北軽の先輩たちのことが羨ましくなりました。

笑え、浅間っ子！

# 熱血コーチとともに、目指せ、全国！「北軽井沢ジュニアソフトテニスクラブ」

放課後、午後3時半過ぎ。冷たい北風の吹く北軽井沢小学校のグラウンドに、ラケットを持った子どもたちが次々と駆け出してきました。低学年の子が率先してネットを張り、コートの準備。全員が揃ったところで準備運動をして、部長の号令で練習が始まります。高学年ともなると打ち合う球のスピードの速いこと！パコンというよりはパシッと空気を切り裂くような打球音とスイングは、大人顔負けの迫力です。

スポーツ少年団のひとつとして、35年ほど前に創設された「北軽井沢ジュニアソフトテニスクラブ」。県内でも3本の指に入るという歴史あるクラブですが、ここ数年は、団体戦での全国大会での入賞や、個人で選抜代表チームに加わる選手も出るなど、めきめきと成長を遂げています。

その躍進を支えているのが、長年コーチを務める青木裕治さん。20代半ばから20年以上もの間、畜産士の本業のかたわら、子どもたちの指導に力を注いでいます。

「指導といっても、練習メニューなど細かいことは子どもたちが自主的に、上級生から下級生に伝えています。僕が教えることといえば『あきらめない！』ということくらいかな。北軽井沢クラブは、どこよりも大きな声で応援ができるチームとして褒められるんですよ！」と誇らしそうに子どもたちを見つめる青木コーチ。

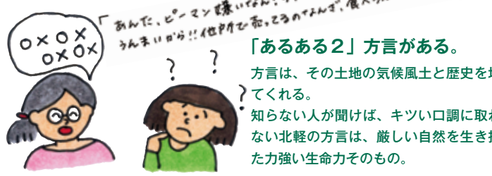
雪が積もり校庭のコートが使えなくなるまであとわずか。ナイター照明のついた校庭には日没後も、子どもたちの元気な笑い声と飛び交うボールの音が響きます。

現在メンバーは、1～6年生までの男子4名、女子14名の計28名。取材に訪れたのは、春の全国大会の予選を兼ねた秋季大会目前のタイミング。6年生の部長・青木香林さんは「これが最後の大会と思うと少しさみしいけど、優勝目指してがんばりたい！」と力強くコメントしてくれました。

# 北軽あるある

初めて北軽を訪れたときや、住み始めたばかりのときは新鮮だけど、
長く住んでしまうと少しずつ感動は薄れてしまいがち。それでもやっぱり
北軽が好き…と思ってしまうから、ここから離れられないわけです。今回は、
そんなしみじみとした良さを集めた総集編。
存分に「あるある」と頷いていただきたい。

**「あるある１」**
**浅間山が見えて、空が広い。**
どこに住んでいたって、いいことばかりじゃない。でも、どんなに落ち込んだときにも山はあり、空は広い。

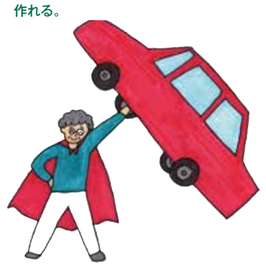



**「あるある２」方言がある。**
方言は、その土地の気候風土と歴史を垣間見せてくれる。
知らない人が聞けば、キツい口調に取れなくもない北軽の方言は、厳しい自然を生き抜いてきた力強い生命力そのもの。

**「あるある３」**
**田舎とも都会ともいえない、絶妙なバランス。**
暮らしに必要なものは手に入る。ライフラインも整っている。葬式などのときは隣近所の手伝いがあるが、息の詰まるような付き合いはない。満員電車も通勤ラッシュもない（収穫時のトラクター渋滞はある）。東京まで2時間半という距離感もちょうどいい。

**「あるある４」**
**どこへ行くにも峠を越える。**
面倒なようだが、出かけた先の「世の塵」を払ってくれる、大事な峠道。

**「あるある５」**
**何かあっても、どうにか生きていける安心感。**
電気が止まっても、水道が止まっても、ガスが止まっても、何とかなる。川も流れてるし、火も焚ける。野菜も作れるし、薪も作れる。



**「あるある６」**
**聖人君子はいないが、人間臭いヒーローはいる。**
常日頃の頼まごとは面倒がるが、いざという時は助けてくれる。
（雪道でスタックした人を助けるなどの、非日常感が必要）

**「あるある７」**
**一にも二にも、冬が厳しい。**
寒くて辛いと誰もが口にするし、散々なこともたくさんある。けれど、強烈な寒さは鈍っていた感性を揺さぶり、五感すべてが鋭敏になる。毎日感動。

**「あるある８」**
**寿命を延ばすほど、新緑が美しい。**
地元のじーさんばーさんは、次の新緑を見てから死にたいと言う。見終えた後は、こんなに美しいなら来年も見たいと言って長生きする。

イラストレーション／NANA

「きたかる建物応援団」がゆく！

# 〈第五回〉小宿の茅葺民家集落

絵・文　伊郷吉信

「自由建築研究所」代表。協同組合「伝統技法研究会」副理事。NPO「あさま北軽スタイル」理事。設計活動とともに、建物保存活用のためのアドバイス、調査、研究を行なう。「こぶしの家移築プロジェクト」「狩宿茶屋本陣調査」等、北軽井沢・長野原町とも縁が深い。

## 建物に残る養蚕の記憶

夏の終わりに応桑から嬬恋へ抜ける国道沿いの集落にいた。少ない平地には畑を焼く焦げた匂いが立ち込めていた。煙を透して低い日差しがさしてきた。冬がすぐ近くまで来ているのだ。

茅葺民家のある里山の風景は日本の心象風景といえる。ここは数少なくなった茅葺屋根が残る小宿集落である。茅葺屋根の多くは鉄板が被さっているが数棟は茅葺きのままである。集落の西のはずれで、ここで生まれ育った入澤春江さん（81歳）に話を聞いた。

小宿にはかつて25、6軒の世帯があったというが今は浄林寺を入れて8軒あるのみである。こんな小さな集落でも専業の茅葺き職人が2人もいたという。いかに茅葺屋根は頻繁に手入れが必要であったかが分かる。

春江さんの住んでいた茅葺民家が、物置とし残されている。寄棟屋根の前面を切り落とした形で2階を蚕室としていた。養蚕を行わなくなってから2階は若夫婦の室となった。かつての間取りは10畳と4畳に土間があり、土間には囲炉裏のある床が張り出していた。また、土間の西側には厩屋があり、東側には桑置き場があった。

日本の民家は、生業によりその姿を変化させてきた。蚕室の面積を増やすため屋根裏を使用し、採光、通風を取るため、正面を切り落とした。時代が下ると完全に二階寄棟の形となり、さらに「出梁造り」と呼ばれる構造で2階が1階壁面より迫り出した切妻屋根へと変化する。

さらに話を聞くと、前橋の養蚕試験場から指導者が来て蚕種（たねおこ）を飼ったこともあるという。養蚕は春、夏、秋三回行った。え！滝原集落を取材した前号では、応桑の養蚕は年1回、大正時代には衰退したと書いた。しかし、春江さんの証言では、ここではよい桑が取れ、昭和40年近くまで養蚕を行なったという。春江さんは幼少ときから養蚕の仕事を手伝わされたというから間違いない。集落や、家により養蚕への力の入れ方が違うからだろうか。小宿の他の家では、養蚕は年一度という家もある。

茅葺民家での生活は想像しただけでも寒く厳しい。しかし、現代人が忘れてしまった暮らしの知恵や心の豊かさに満ちている。住居であり、仕事場でもあり、寄り合う場所であり・・・生活のすべてがここに含まれるからである。残せないものか。過去から未来を学ぶために。

# 落葉とツリーハウスと

佐々木幹郎

北軽井沢と言えば、どうしたことか、最初に思い浮かべるのは、落葉のことである。カラマツの落葉、広葉樹の落葉。秋の枯れ葉が霧のように風に舞い上がり、また風に流される北軽井沢。広大な樹林の間を散策すると、いつも気分が明るくなる。夏の間の湿気に満ちた軽井沢の空気が乾燥しだす。

秋が深まると、夜道をイノシシの母親が子どもたちを連れて歩く。車が通りかかっても驚かない。キツネが長い尾を水平に伸ばして山道を走る。落葉の上を走るキツネは、ことさら美しい。獣たちが生き生きとしだすのが、秋だ。紅葉が夕陽に照らされると、梢の上で血のような色を滴らせて、揺れる。

わたしが一カ月に一度、週末に滞在する山小屋は、北軽から車で二十分ほど群馬県側に入った、嬬恋村の山の麓にある。山の斜面に三棟の木の小屋があって、台所がある旧館、寝室に使う新館、そして書斎棟がある。

このうち新館は、村の友人たちと一緒に一年がかりで手作りで建てた。山小屋は友人たちと共同で使用している。村の数家族が子ども連れで遊びにやってきて、朝、昼、晩の食事をともにする。東京からも友人たちが遊びに来る。この山小屋で出会った男女が何組も結婚して、二代目が生まれ、その子どもたちが生まれ、いまは三世代が山小屋で遊ぶ。ベランダも階段も手作りなので、どこかが悪くなると誰かが補修する。ここを利用する誰もが、自分の山小屋だと思っているからだ。

夜、屋根の上を、コン！　コン！　と叩く音がすると、クリの実が落ちる音だ。キツツキが小屋の木の壁を叩いて穴を開けるときと良く似た響き。やがて、コロコロと屋根を転がる音がして、クリの実であることがわかる。

その実を落とす大きなクリの木の上に、ツリーハウスを作った。ゴシック教会の尖塔を真似た作りで、屋根は銅板葺き。窓にはステンドグラスを入れた。北軽の別荘から谷川俊太郎氏が遊びにやってきて、「魔女の館」みたいだと言った。

広瀬 弦（Gen Hirose）

イラストレーター。1968年東京都生まれ。絵本・挿絵などで、個性のたかな仕事が高く評価されている。『かばのなんでもや　すうすうすう、ふあああん』（佐野洋子作／リブロポート）でサンケイ児童出版文化賞推薦。『空へつづく神話』（富安陽子作／偕成社）で産経児童出版文化賞受賞。主な作品に『まり』（クレヨンハウス）、『けんけんけんのケン』（ひさかたチャイルド）、『西遊記』シリーズ（理論社）『とらねことらたとなつのうみ』（PHP研究所）など。今年11月に新刊『いそっぷ詩』（谷川俊太郎作／小学館）を刊行予定。北軽井沢には母・佐野洋子の山荘があり、幼少の頃よりたびたび訪れている。

## 編集後記

僕のうちには犬がいる。今年のゴールデンウィークに北軽のフリーマーケットで出会った。北軽生まれのオスの雑種。ちょうどその頃コブシの花が咲いていたので、コブシと名付けた。生後二ケ月、そりゃあ可愛かった。

雑種は頭がいいと聞いていた。実際、以前飼っていた雑種のチャッピーは頭、性格ともに申し分なかった。おまけに顔つきもすばらしかった。ところがコブシときたら・・・。

リードを噛み切り、脱走し、近所の人から「コブシがうちの玄関先で笑って座ってる。」とメールを貰ったり、散歩中に急に反転して走り出して転ばされたり、ドッグランで放したはいいが捕まえるのに小一時間かかったり・・・。あ、そうそうこんなこともあった。

散歩して帰って30分もたっただろうか、寝ているコブシに声をかけた。コブシはいつものように首をもたげた。いつもと違っていたのは、その目が閉じたままなのだ。冗談も休み休みやってくれと思いながら近づいて見るとなんと両目がコテンパンに殴られたボクサーみたいに腫れているではないか。そうこうしてるうちに、今度は唇がみるみる腫れてきた。慌てて病院に連れて行って事なきを得たが、どうやら地中の何かを食べてアレルギーを起こしたらしい。先生には笑われるし、病院に診察に来ていた人には「何犬ですか？」と聞かれるし。

そんなコブシだが、そのつぶらな目はあくまでも透き通り、そのピンと立った大きな耳はどんな小さな音も聞き逃さない。脱走して未知の森の中を走り回るのも、たぐいまれな好奇心のしわざだし、アレルギー事件も鋭い嗅覚の成せるわざなのだ（ちょっと失敗したけどね）。そして何より、その立ち振る舞いは僕の心を癒してくれる。

雑種の、いや北軽犬コブシ。僕は君を見習おうと思う。そしてもっともっと良い誌面をつくっていきたい。（S）

**きたかる vol.8**

**２０１７年１１月発行**

**企画・編集・制作／きたかる編集部**

［編集長］藤野麻子［編集］AKIKO・福嶋悠貴　［写真］田淵章三・田淵三菜（森の写真館）［デザイン］田淵章三［WEB 制作］G+G

**発行／北軽井沢じねんびと**

**印刷／上毛新聞 TRサービス**

**※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。**

**お問合せ：きたかる編集部**

**メールアドレス：info@kitakaru.me**

**住所：〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1924-1360**

**「きたかる」へのご意見・ご感想をお寄せください。**

**「きたかる」ホームページ　http://kitakaru.me**

北軽井沢の季節の風景、イベント、取材こぼれ話など、WEB 版も更新しています。

**※本誌掲載の写真・文章を無断で複写・複製・転載することを禁じます。**